

『学習院大学史料館紀要』第二八号

令和四年三月（二〇三二年）

# 宮中晩餐会の歴史的考察 その（三）

—大婚二五年記念祝典・皇后の活躍—

長佐古美奈子



【長佐古 口絵1】東京慈恵医院行啓／満谷国四郎画  
(明治神宮外苑聖徳記念絵画館蔵)



【長佐古 口絵2】赤十字社總會行啓／湯浅一郎画  
(明治神宮外苑聖徳記念絵画館蔵)



【長佐古 口絵3】撮影時期不明  
洋装皇后写真（個人蔵）



【長佐古 口絵4】明治42年  
第17回日赤總會行啓時洋装皇后写真（個人蔵）



# 宮中晩餐会の歴史的考察 その（三）

## ―大婚二五年記念祝典・皇后の活躍―

長佐古美奈子

### はじめに

前々稿<sup>〔1〕</sup>、前稿<sup>〔2〕</sup>と、明治維新後の皇室の西欧化を総合的に示す場としての「宮中晩餐会」、その成立過程を、食卓用品・食器、料理、テーブルマナー、ワイン、皇后の洋装化、その姿の写真撮影、宮殿竣工と装飾、ボンボンエールなどより読み解く作業を行ってきた。

「宮中晩餐会」は国の最高接遇であり、明治皇室と政府は西欧的な接遇を滞りなく行うために試行錯誤を繰り返す。西欧では儀礼・儀式を完璧に行うことが政治的にも文化的にも一流であることの証であった。しかし、日本皇室が西欧儀式の完全なコピーを行うことは技量的にも、そして精神的にも難問が山積していた。そのような中で課題を一つ一つクリアし、日本に相応しい宮中晩餐会を模索し成立させていく。そして「ある意味で」西欧に比肩する、日本に相応しい宮中晩餐会が完成したのは、明治三十二年（一八八九）の大日本帝国憲法発布式、日本が東アジアで初の立憲君主制国家となったことをお披露目する宮中晩餐会であった。これは日本が「政治的」に西欧に追いついた（であろう）ことを披見する場でもあった。

一方で日本が「文化的」に西欧に追いついた（であろう）こと披露する場は、その五年後、明治三十七年（一八九四）の明治天皇皇后の銀婚式、大婚二五年記念祝典となる。

本稿では、この大婚二五年記念祝典に至るまでの間の外賓接遇の推移と、西欧君主的振る舞いを身につけていく皇后の姿、その一方で日本固有の文

化の継続を奨励する皇后の姿、そして、大婚二五年記念祝典当日の状況を史料から読み解き、この時代像を構築していきたい。

本稿も科学研究費助成事業基盤研究（C）「近代皇室の総合的西欧化過程研究―美術工芸品と文書史料双方向からのアプローチ―」（課題番号20K00175）において研究対象としている学習院大学文学部史学科所蔵香川家史料（香川敬三・志保子関係史料）を使用した<sup>〔3〕</sup>。同史料の整理・調査については上野秀治、石井裕、梅田優歩に研究協力を依頼した。また洋装については前稿同様植木淑子に教示を得たことを冒頭に記しておきたい。史料引用にあたっては、イギリス、フランスなど諸外国名表記は適宜略して記述した部分があることをご容赦いただきたい。また、旧字を適宜新字に変換して記した。

### 一、明治三十二年大日本帝国憲法発布式その後

明治三十二年二月一日の大日本帝国憲法発布式、その祝典と饗宴・宮中晩餐会とは新築の明治宮殿で行われた。この祝典・宮中晩餐会に際しては西欧の儀礼に通じたフォン・モールを招聘し指導を受けた。皇后は洋装を着用し、宮中晩餐会では初めてボンボンエールを下賜するなど、西欧的な正餐会の形をある程度整えた日本皇室であった<sup>〔4〕</sup>。しかし、その推進を行ったフォン・モールにしてみれば、まだまだ完成にはほど遠いものであった。その一つに舞踏会の開催がある。大日本帝国憲法発布式では祝宴の後に正

殿において舞樂が演じられている。これはモールにとっては画竜点睛を欠くものであったのではないか。

日本における舞踏会の開催の様相を概観しておこう。

モール以前に欧州の宮廷の儀礼の在り方を研究し、日本にも導入しようとした人々がいた。その牽引者は井上馨である。相次いで来訪する外賓の接待に関する礼式を取り調べるために、明治十二年（一八七九）一〇月、宮中に取調所が設置され井上馨が委員長に任ぜられた。翌十三年（一八八〇）二月に、調査結果をまとめ「内外交際宴会礼式」が定められた。その当時英国にいた太政官権少書記官末松謙澄も「英国皇室諸礼觀察報告」などを宮内卿徳大寺実則に提出している。それらを筆写し所持していたのが後にフォン・モールの通訳を務め、宮中の式事を掌ることになる長崎省吾である。国立国会図書館憲政資料室蔵の長崎省吾関係文書中には宮内省野紙に記された「西洋礼節」、「礼式（イギリス宮中の公会謁見式等）について」、「普国礼典」など末松がイギリスから発信した報告を筆写したもののみならず、数多くの西欧儀式礼式を取り調べた書類が残る。また宮内庁宮内公文書館蔵の「御用度録」にも「仏国儀礼書 仏貨百二拾弗 仏帝國儀式書仏貨四拾五弗 仏帝内礼式 仏貨二拾弗」などの書籍購入記録も残る。

これらの内容を見ると、「大饗宴アリ次テ宮中劇場ニテ小演劇アリ」「宮中ニテハ仮面舞、舞踏、鹿猟、兎猟ノ催シアリ」など、西欧においては晩餐会、舞踏会、音楽会、オペラ、狩猟などが接遇のパッケージとなっており、その時に応じて種々組み合わせで行われていることが記されている。

前稿でも述べた通り、その接遇パッケージの中でも西欧諸外国との交際においては舞踏会の開催とそこでの舞踏は必須項目であった。この課題を解決するために、この時期鹿鳴館で華族、特に子女への舞踏稽古が頻繁に行われていたことは前稿で確認したが、華族子女だけでなく皇室を取り巻く宮内省の人々もその渦中に巻き込まれていた。例えば明治十九年（一八八六）当時皇太后宮大夫であった杉孫七郎がダンスの稽古に翻弄されている様子を香川敬三が英国留学中の娘志保子にあてた書簡より確認することが出来る。

小松宮ニテ踊会相始り、昨今度々稽古有之候、近衛将校ニテ相始メ候者多分有之候、杉氏モ踊り申候、妙ナ世ノ中ニ御座候、是モ文明ヲ進ムル一段トモ可相成<sup>15</sup>

本邦ニテモ舞踏会大流行、杉氏マテモ相始メ申候、何ント奇ナルヲニハ無之哉、敬三モ大分上手ニ相成申候間、御帰朝ノ頃ニハ少々ハ御相手モ出来可申歟、今ヨリ相楽居申候、御一笑可被下候<sup>16</sup>

オトリ杯も伊藤家夫人令嬢・小松宮御夫婦・高木・林・長崎・三宮夫婦・戸田氏夫婦・岩倉氏夫婦等が先達ツ、其他ハ牛ニヒカレテ無摠善光寺参りト申有様ニ御座候、桜井夫婦・吉井氏妻及敬三杯ノ類ハ真ノ御相伴ナリ、杉氏ノオトリ頗ル捧腹、元方ノ英国杯ハ左程オトリニ出精不致由、案外之事ニ存候、且日本夫人・諸女子ノオトリノ有様小子ノ見ル所ニ而、あまりさわかしく見苦敷ニ存候、就中伊印娘カ舞台ヲ飛あるき、男ノ手ヲ引張、セナカラ打タ、ク風、尤見ルニ不忍有様ニ候、歐洲人ト一所ノ節ハ、カノ人々苦笑ひ致居候様ニ見受ケ申候、何卒是ハ改正致度、他ノ踊ヲ不好人兮却而ソシリヲ受ケ候様相成、文明進歩ノ害ト可相成頻リニ苦心致居申候<sup>17</sup>

このようにそれぞれがかなりの苦勞をして、批判もある中で舞踏会を完成形に導こうとしている様子がしのばれる。稽古の成果は鹿鳴館や各宮家、華族家開催の舞踏会や音楽会で発揮された。しかし、宮中においては宮中晩餐会の後に舞踏会が開催された形跡は現在のところ確認出来ない。また祝典の際のオペラ上演も同様である。前述の通り、大日本帝國憲法発布式祝典では、宮中晩餐会の後には舞樂が催された。オペラ上演を日本風に解釈したものと思われる。

モールはこの後、自らの意見書において外国使臣を招待する天長節ではドイツ皇室に倣い、「夜会」即ち、宮中晩餐会よりはカジュアルな宴とし、

歌舞伎や能、楽隊による演奏を催し、天皇皇后と招待客が団欒することを提案している<sup>(18)</sup>。

天長節ノ当日ハ午前ノ御儀式相畢リタル後チ 夕刻ニ至リ皇居ニ於テ夜会御催シ相成テハ如何 尤モ当夜々会ノ趣向ハ独逸国皇室ノ夜会ノ如ク俳優又ハ唱歌者ヲ以テ其興ヲ添フル「能ハズ 如何トナレハ日本ニ於テハ未タ俳優ノ地位之ヲ独逸国ニ比較セハ稍、低クシテ 且ツ是迄ノ風俗ニ逆フルニ依リ強テ一様ニ相成難キ場合モアレハナリ 依テ之ニ換ユルニ能狂言又ハ上等ノ日本手踊 若クハ音楽等ヲ以テ其興ヲ添ヘ其間ニ海陸軍ノ楽隊ヲシテ交番ニ奏樂セシメバ充分ノ儀ト思考ス 抑モ斯ノ如キ夜会ノ旨意ハ単ニ遊戲飲食ヲ以テ主トスルモノニアラズ 皇帝皇后両陛下ニ親シク接スルノ機会ト榮譽トヲ得セシメ 且両陛下群臣ト団欒一和シテ交情ヲ厚フシ歛樂ヲ偕ニスルヲ以テ目的トスレハ格別ニ遊興ノミヲ考慮スルニ足ラス（後略）

この意見を宮内大臣土方久元は明治二二年（一八八九）八月七日に天皇に上奏した。天長節の際の賜宴を改めて「夜会」とし、「舞踏」または「音楽を催させらるる」ことというものである。しかし天皇からは「先例の儘」でとの沙汰であった<sup>(19)</sup>。結局その後の天長節は

宮中における大宴会への招待の代わりに、日本では外相が、天皇誕生日にヘンリョー館（延遼館）で正式の大きな夜会を開き、これは外交団や他の外人たち、それに日本人の同僚たちを招くことになっていた。ただあの頃、ドイツの宮内相あるいは陸相主催の舞踏会のように、皇室の面々がこの日本外相主催のパーティーにお出ましになるべきかどうかで議論された。天皇はお出ましになるご意向だったが、皇后が躊躇され、結局、皇族の親王、内親王がそれぞれ両陛下の代理として出席される運び<sup>(20)</sup>。

という形に落ち着いた。この決定からは天皇の舞踏への好悪感情は明らかにならないが、天皇は舞踏を好んでいなかったとされている。

明治二二年（一八八九）一月一九日、天皇皇后は小松宮邸に行幸した。前年に欧州差遣から戻ったばかりの小松宮彰仁親王は、「始メカラ仕舞迄純粹ノ歐羅巴風ノ夜会デ、食後ニ舞踏ヲ催フサレ」た<sup>(21)</sup>。その後「畢りて舞踏場に臨御、彰仁親王及び其の妃並びに参会諸員の洋風舞踏を覧たまふ、戯未だ終らず、久元を促して座を起ちたまふ、蓋し之れを好みたまはざるなり」<sup>(22)</sup>と記されており、これが根拠とされている。しかし、長崎省吾の談話速記によれば同日の舞踏について

舞踏ト云フモノハ猥雑ナ悪イモノト聞イテ居タ、今日往ツテ見ルト一向攻撃スルコトガナイデハナイカ、アレハ一体何処ガ悪イノカト云フコトヲ徳大寺サンニ御沙汰ニナツタ<sup>(23)</sup>

と述べたという。

いずれにしても「舞踏会」は宮家や華族家での開催が主となり、天皇皇后は傍観者であった。

前述したように舞踏会の他にも西欧王室で行われる接遇には狩猟や、演劇、演奏会、競馬などがある。これをそのまま日本で行うことは物理的（設えや技量など）にかなりの困難を伴う。そこで宮中では西欧の催しの日本風への読み替えを試みた。大日本帝国憲法発布式でオーケストラ、オペラの読み替えとして奏樂を行なったように、ポロの読み替えとして打毬の実演、狩猟の読み替えとして鴨場での鴨猟などである。これが日本皇室の接遇の様式となつていく<sup>(24)</sup>。

## 二、皇后の西欧君主振る舞いと日本固有文化の保護

皇室の儀礼に大きな影響を与えたモールであるが、儀礼・礼式や勲章佩用のことなどのハード面だけではなく、西欧君主的な振る舞いというソフト



ト面についても教示した。それは特に皇后に新たな視点や使命を与え、皇后のあるべき姿を確立していく標になったと思われる。

洋風に王侯の職務を果たすことを感受性の強いいまの皇后は熱心に望まれた。ドイツ帝国皇后兼プロイセン王国王妃アウグスタの実例が、日本の皇后にとって模範となった。国民教育制度への関与、病人の看護、日本赤十字会長の座につくこと、外交団ならびにしきりに東京の宮中を来訪するようになった外国の王侯たちの応接、それに時代の精神的なすべての動きに関心をよせることなどが日常のご生活の中で皇后がもつと心にかけられたことがらであった。<sup>(26)</sup>

西欧では慈善、教育は女王、妃の役割であった。これに倣い、皇后も慈善活動、教育活動に邁進していく。中でも熱心に取り組んだのは日本赤十字社、慈恵医院の活動である。

来日早々、皇后が設立、保護されることになったベルリンのアウグスタ病院に模した日本の病院が開院した。そこへ皇后は宮中の人々とともにお出ましになった。皇室のお姫さまたちや多くの招待者が集合し、見学に先立って皇后にお目通りした<sup>(27)</sup>

と、日本赤十字社病院開院の際の様子をモールドは記している。

日本赤十字社は明治一〇年（一八七七）の西南戦争中に設立された救護団体「博愛社」がその前身であり、日本政府のジュネーブ条約（赤十字条約）加入翌年の明治二〇（一八八七）年五月に「天皇皇后の御眷顧の下に博愛社を置き」「博愛社を日本赤十字社と改称<sup>(28)</sup>」したものである。

一方の慈恵医院は明治一四年（一八八一）に高木兼寛により作られた医学団成医会を明治一六年（一八八三）に有志共立東京病院として病院開設した。その後明治一九年（一八八六）一〇月二六日に「泰西諸国の例に倣ひ、皇后を仰いで総裁と為し」、赤十字社と同じ明治二〇年の一月一九

日には東京慈恵医院と改称したものである。その経緯を香川家史料よりおつてみると明治一九年六月三〇日に婦人慈善会より皇后への上奏書が皇后宮大夫香川敬三に出された。香川からは以下の文が同年一〇月八日に上奏され「皇后宮へ伺済ミ」となった。<sup>(29)</sup>

東京病院ノ規模ヲ拡張シ無告ノ患者ヲ救済セン為メ其施療方法ノ備具ヲ期シ 皇后宮親シク御総裁被為遊度 上言之趣 慈善ノ旨意神妙之至被思召 御允許相成候事

明治二〇年四月に皇后は「朝野慈善の婦人及び群臣民を諭し、各々応分の寄附を為して慈恵の資に充て」る旨の令旨を下した。<sup>(30)</sup>

やまひは萬のくるしみを生ずるもとにして その不幸は富貴なる人も同じことながら 分てまつしきは 病にかゝりても医師の治療を受けることを得ざるによりて いゆへき病も終にいえす その身はもとより妻子までも 不幸に陥るにいたるまことに哀むべきものなり されは我祖宗は夙にかゝる不幸の民をすくふことをつとめ給ひ 施薬院を設けて普く疾病のものをすくひ養ふべき所となし給ひ 天平宝字元年 勅して越前国の壱田一百丁を以て施薬院に附し 朕と衆生と永く病苦の憂を減し 共に延寿の樂を保たんとねかひ給ひしは 実に難有御事と申すへし 今や百事祖宗の遺意に法り泰西の文物をもとりもちひ給ふときに あたりていまた充分に貧者に施薬する設なきは 常に憾とする所なりしに頃ろ婦人慈善会委員上奏して有志共立東京病院を 更に一層拡張し余か眷顧の下に置かんとこふ 余はなはたこれをよみすしかるに今はいにしへと事かはり かゝることにまて国庫の財を費やすを得されは 広く有志のちからによりてこれを維持する様なさゝるへからず これ上下慈善をとものに施すものにして 余かはなはた楽しむ所なり よりて先若干金を寄附して東京慈恵醫院の費に供せしむ 朝野慈善の婦人および群臣民 よく此旨を体して 各応分の寄附をなし 以て天平宝字の勅の如く 永く病

苦の憂を減し共に延寿の樂を保たしむへき仁恵をなさんことを望む。

この令旨には皇后の思考が表れている。「泰西諸国の例に倣ひ、皇后を仰いで総裁と為し」たが、「天平宝字元年勅して越前国の壱田一百丁を以て施薬院に附し朕と衆生と永く病苦の憂を城し共に延寿の樂を保たんとねかひ給ひしは実に難有御事と申すへし」と古代に範を取る姿勢も忘れない。同じく明治二〇年一月一七日の「婦女服制についての思食書」の内容、すなわち洋装は、日本古来の衣・裳と同じ構造であり、これは立札に適し、動作にも便利であるので洋装化は理にかなっている、しかしその製造には必ず国産を用いることという、西欧を取り入れながらも日本の古代に範を持ち、国産品の使用を奨励するというロジックと同一なのである。

いずれも同じ明治二〇年に改称設立した二病院への行啓は明治末年までの二五年間で、日本赤十字社へは二五回、恵医院には二六回に及んだ。この二社への行啓の様子は明治神宮外苑聖徳記念絵画館蔵の画「東京慈恵医院行啓」<sup>(34)</sup>、「赤十字社総会行啓」<sup>(35)</sup>にも描かれており、皇后の行動を象徴するものであった【長佐古口絵1・2】。

令和三年（二〇二一）六月と一二月に筆者は旧宮家において二葉の皇后洋装写真【長佐古口絵3・4】を見する機会を得た。〔写真1〕（長佐古口絵3）は構図・背景から恐らくは皇居内（写真所）で写真師により撮影されたと推測されるものである。管見ではこの洋装写真には見覚えがなかった。洋装はそのスタイルからある程度の年代が推定が可能となる。植木淑子によればこのドレスは平常服（ヴィジティングドレス）<sup>(36)</sup>であり、ドレスが身体に沿った形で袖山が膨らまず、スカートのボリュームがあることからバツルススタイルと考えられる。そこから考えられる着用年代は明治二〇年前後ではないか、との推定であった。さらに植木よりこの平常服の皇后写真と明治神宮外苑聖徳記念絵画館蔵「東京慈恵医院行啓」画【長佐古口絵1】の類似性の指摘があった。

「東京慈恵医院行啓」は明治二〇年五月九日の東京慈恵医院開院時の行啓の様子を満谷国四郎が描き、昭和二年（一九二七）に東京慈恵会が奉納

したものである。絵画館の壁画制作過程を記した「壁画謹製記録」<sup>(37)</sup>によれば

画伯ハ大正十四年七月十一日ニ臨時帝室偏修局ニ赴キ 皇后宮ノ御洋服図面ヲ拝見シ 奉賛会ニ御洋服姿ノ御写真拝借方ヲ乞ヒ 下図ノ製作ニ着手シタ

とある。これは大正一四年（一九二五）の夏の時点では、満谷が参考にした皇后の洋装姿の写真が存在していたことを示唆している。現時点ではその時参考にした皇后の洋装姿の写真の所在は不明である。今回見つかった〔写真1〕（長佐古口絵3）はドレスの類似性から、満谷が参考にした洋装写真と同一である可能性が高いと思われる。

ではこの写真はいつ撮影されたものであろうか。皇后の洋装変遷を『明治天皇紀』、『昭憲皇太后実録』、香川家史料より抜き出し、撮影年月を推定してみたい。

- ①明治一九年六月二三日 宮内大臣伯爵伊藤博文が皇族並びに大臣・勅任官・有爵者・麝香間祇候等にむけて今後時により皇后宮も西洋服装を用いる旨通達（『明治天皇紀』<sup>(38)</sup>） 皇后宮大夫香川敬三を青山御所の皇太后の元へ遣わし、今後皇后が洋服を用いることを伝える（『昭憲皇太后実録』<sup>(39)</sup>）
- ②明治一九年七月二五日 伊藤博文より香川宛書簡「平常服のみで礼服の備えがないと不体裁である、と青木が言っている」（香川家史料No.20876）<sup>(40)</sup>
- ③明治一九年七月二八日 皇后はじめて洋服を着用（『昭憲皇太后実録』<sup>(41)</sup>）
- ④明治一九年七月三〇日 華族女学校へ洋服で行啓（『明治天皇紀』<sup>(42)</sup>）
- ⑤明治一九年八月一〇日 皇后洋装にて初めて外人に謁見（『明治天皇紀』<sup>(43)</sup>）

この時系列から考えると②明治一九年七月二五日時点では平常服は出来上がっていたと捉えられ、その準備は①の六月二三日には既に始まっていたと考えられる。皇后が初めて洋装を着装したのは③明治一九年七月二八日



【図2】「皇太后宮赤十字社総会臨御」（『昭憲皇太后史』）



【図1】〔写真2〕（『長佐古口  
絵4』）皇后部分拡大

であると記されているが、この日に着用してどこかに行った、誰かにあった、との記載はない。何もなかったのに記録に残る理由は何であろうか。はじめての洋装の着用写真を撮影した可能性もあるのではないだろうか。

またこの「東京慈恵医院行啓」画には、皇后からの下賜品である玩具を

女官が患者に手渡す様子も描かれている。この玩具は「毛植の犬」と呼ばれる工芸品で、宮中で子供への下賜品として使用されてきたものである<sup>(44)</sup>。ここにも日本伝統産業の保護意識が見て取れることを指摘しておきたい。もう一葉の（写真2）（『長佐古口絵4』）は「国民新聞社謹製」と銘のある台紙に添付された洋装写真である。手にした令旨に「赤十字社第一七回総会」と微かに読める【図1】<sup>(45)</sup>。

赤十字社第一七回総会は明治四二年（一九〇九）六月四日に日比谷公園で開催され、確かに皇后の行啓があった。赤十字社総会への行啓と言えば、前述したに明治神宮外苑絵画館の「赤十字社総会行啓」画がまず想起される【長佐古口絵2】。この画は明治三五年（一九〇二）一〇月二日に上野公園で開催された第一一回総会及び創立二五年紀祝典の様子を描いたものである。画家は湯浅一郎、昭和四年（一九二九）に日本赤十字社より奉納されたものである。

赤十字社へ行啓した際の写真はその他に上田景二編『昭憲皇太后史全』<sup>(46)</sup>の口絵に収められた明治後期と思われる写真がある【図2】。しかし、服装の相違から、今回見つかった「写真2」とは別日のものと考えられる。

洋装の皇后写真は前稿で示した鈴木真一・丸木利陽撮影による公式な四葉<sup>(47)</sup>の他には、絵葉書などに印刷された不鮮明な写真が多く、真贋も定かではない。今回のこの二葉の写真については未だ詳細が不明な部分が多いが、皇后を被写体として撮影していることは確かであり、新たな皇后写真の発見と言ってよいであろう。この二葉の写真の来歴調査については今後の継続課題としたい。

赤十字社には、現在までその配分によって国際赤十字の活動をささえる「昭憲皇太后基金」が存在している。元々は明治四五年（一九一二）に第九回赤十字国際会議がワシントンで開催された際に、赤十字の「平時の活動」を奨励するために昭憲皇太后が国際赤十字に寄付した十万円（現在の価値で三億五千万円に相当）を基に創設されたものである<sup>(48)</sup>。今泉宜子によれば昭憲皇太后がこの基金を始めるきっかけとなったのは、日本赤十字社



副社長小澤武雄が皇后の下問に答え、ヨーロッパ王室皇后の寄付により赤十字に設立された二つの特別基金について説明したことによると言う。<sup>(49)</sup>その二つの基金とはロシア皇帝アレクサンドル三世の皇后マリア・フィodorovnaの「マリア・フィodorovna基金」とプロイセン王およびドイツ皇帝ヴィルヘルム一世皇后の「アウグスタ基金」である。今泉が指摘するようにこの小澤の説明が昭憲皇太后基金に結び付いたことは想像に難くない。明治二〇年に大礼服・ティアラ等をベルリンに発送したことは前稿で記したが<sup>(50)</sup>、それ以来この明治末の四五年（一九一二）に至るまで皇后の模範はアウグスタ皇后であったのであろう。<sup>(51)</sup>

### 三、この間の動向―外賓接遇

大日本帝国憲法発布式の後、皇室は数多くの外賓を接遇することになる。宮中正餐を伴わない規模のものでも、西欧諸国から認められる儀礼・振舞いを行えるようになっていった。そのいくつかを見て行きたい。

明治二三年（一八九〇）にオスマン・トルコ帝国皇帝アブドゥルハミト二世は、日本との平等条約締結の促進と、明治二〇年の小松宮のトルコ訪問に対する返礼などを目的として、親善使節団を派遣した。親善使節団の特使には、エミン・オスマン海軍少将（オスマン・パシャ（提督）が任命され、エルトゥール号にて来日した。特使の来日であったことから晩餐会は竹の間にての開催であった。その後エルトゥール号では多くの船員がコレラに罹患したことから滞在が長引き、同年九月一日にようやく横浜港から帰港の途についた。しかし、翌九月一六日に同号は和歌山県大島樫野崎付近沖で座礁・沈没し、死者五八七名にのぼる海難事故を引き起こした。この際皇室は侍医二名を派遣し、九月二〇日には日本赤十字社へ医療スタッフの派遣を依頼した。また東京慈恵医院へも遭難者を入院させるよう天皇皇后よりの沙汰が出された。皇后からは肌衣が下賜され、小松宮からはビスケットと葡萄酒が下賜された。日本赤十字社では現地に仮分

院を設置し救護活動に邁進した。生存した六九名は神戸で治療を受けた後、同年一〇月五日、日本海軍軍艦比叟、金剛により帰国の途につき、翌年一月二日に無事イスタンブールに入港し、トルコ国民の感謝に迎えられた。<sup>(52)</sup>現地串本での活動が終了した明治二三年一〇月二二日に日本赤十字社長佐野常民より宮内大臣土方久元宛に報告書が出され、全活動が終了した。<sup>(53)</sup>この件は日本赤十字社としては初の国際救助活動となった。串本町はもとより日本政府・皇室・日本赤十字社などの手厚い救護活動はその後の日本とトルコの友好関係に大きく貢献した。

翌明治二四年（一八九一）にはロシア帝国皇太子ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ロマノフが来日した。ニコライは長崎、鹿児島に立ち寄った後、神戸港から京都へ向かった。皇太子の宿所について、当初は京都御所を想定し準備にあたっていた。この場合、寝具は日本夜具を用い、食器その他椅子、卓子、洋式便器などは京都の常盤屋（常盤ホテル）から借用することとなっていたが、運び込みが不便であることから、常盤屋自体を宿所にする事となった。京都常盤屋に投宿したニコライは五月一日に琵琶湖へ観光に出かけた。その途上で警備担当の巡査に切り付けられるという事件が起こった。大津事件である。

大ロシアの皇太子への殺傷行為は近代国家を目指す日本を震撼させる出来事であった。接遇を担当していた有栖川宮威仁親王は直ちに橋本軍医の派遣を求めた。さらに威仁親王は天皇が京都へ赴き直接謝罪することを願った。宮内大臣からは「五月一日午後四時一五分発 京都威仁親王殿下 行幸ハ大津ヘ向ケテノ方宜キカ 京都ノ方宜キカ 直ク返事待ツ」との緊迫した問い合わせがあり、直ちに「キョウトヘギョウコウアイナリタシ」との返信が行き、「翌二二日午前六時三十分新橋御発車 同日午後十時二十分頃京都御着ノ御予定ナリ」という迅速な動きとなった。

一三日天皇は「今午前十時五〇分御出門 露国皇太子殿下ノ御旅館ヘ行幸 殿下ヘ御対面御容体御尋被遊同十一時四十分還幸」した。東京にいた皇后も、皇后宮大夫香川敬三を通じて皇太子の様子を電信にて尋ねている。威仁親王からは皇后に宛てて「五月一二日午後一二時一五分発 同午後一

時一五分着 露国皇太子殿下へ只今御会申セシ処 御発熱モナシ御様子平生ト異ナラス御痛ミモ無キ由申述ヘラレタリ 甚安心仕ル」との電信が返信された。一三日の天皇の見舞が終了した旨は香川大夫宛にも通知され皇后にも知らされた<sup>(35)</sup>。

天皇自らが現地へ行幸し、直接謝意を表明するという未だかつてない迅速かつ真摯な対応をした皇室は、ロシア側に高く評価され、日露関係は悪化する事態には陥らなかった。

明治二十六年（一八九三）にはオーストリア・ハンガリー帝国の皇族フランツ・フェルディナント親王が世界一周の途上に日本に立ち寄った。この時フランツ親王は皇位継承者の息子という立場であったため、どの格式に応じた接遇をすればいいかの判断に迷った宮内省は、各大使館に問い合わせをした。各公使の回答は以下の通りであった。

在英国 河瀬真孝公使 インドにおいては皇太子に対する歓迎。

在独 青木周蔵公使 ベルリンにおいては一皇族の資格にて歓迎されたが、その待遇は最も鄭重であった。

在伊国 中島信行公使 意見無し。

在露国 西徳二郎公使 昨年の報告書を閲覧してほしい（全く皇太子と同様）。

結局、西徳二郎公使の「全く皇太子と同様」にすれば両国間の交際に親密を加える、との意見に従うこととなった。もちろんここには鄭重で西欧的な接遇をすることによってオーストリア・ハンガリー帝国に対し条約改正を有利に導きたいとの意図があったのであろう。

フランツ親王は明治二十六年（一八九三）八月二日に長崎、熊本、厳島、岡山、京都、奈良、箱根、日光などを周遊し、同年八月二四日に離日した。国賓扱い同様に、各地で軍隊の敬礼と地方官の歓迎を受け、正倉院御物を観覧し、保津川下りも楽しんだ。周遊先の各県ではその接遇に奔走した。長崎県では西洋料理店福屋が接遇を担った。接遇に相応しい食器があるかとい

う問い合わせに対し、福屋はサジなどの持ち合わせはあり、ソップ丼（スープ皿）や鉢皿などもみな「仏蘭西白焼」で持ち合わせているが、銘酒コップ類は上等のものが無い旨を回答している。この時期には地方（もちろん長崎は他の地方と比較外の地域ではあるが）の西洋料理店であってもフランス製の洋食器を揃えるまでになっていたのである<sup>(36)</sup>。

フランツ親王は八月一七日には、宮中へ参内し、天皇皇后と対面し、午餐会が開催された。その様子をフランツ親王自身が著わしている<sup>(37)</sup>。

食事は、フランス料理が中心で、すばらしいものだった。飲み物も、料理芸術家の作品に遜色なかったが、ただ、音楽にかざればまだまだ晚餐会にふさわしい域には達していなかった。逆に、ボーイさんたちは―着物姿の娘さんが早足で歩いて世話をしてくれば、さらに興が増したとは思―小気味よくテーブルを回り、行き届いた給仕をしてくれた。また、わがオーストリア宮廷の作法が導入されていたから、これにはなつかしさを覚えるとともに、大いに感激させられた。

六年前にモールが導入した「酒ノ配膳ハ献立書ニヨリ其程合順序及ヒ前後ヲ誤マラサル様注意スヘキ事」「配膳人ノ歩キ方ハ成ヘク靴音ヲ立タサル様注意スヘキコト 若シ配膳人ノ靴粗製ヨリシテ音高キ時ハ速ニ之ヲ改造スヘシ」などの晚餐会接遇マナーがしっかり身に付き、西欧に引けを取らない晚餐会が開催できていたことを、オーストリア王室の一員によりお墨付きを得たのである。

一九日には告別の晚餐会が開催され、フランツ親王へ天皇から大勲位菊花章、村田連発銃が贈られた<sup>(38)</sup>。

フランツ親王は離日の後、一八九六年に皇位継承者に認定されたが、一九一四年にサラエボで暗殺され、これが第一次世界大戦の契機となった。

## 四、明治二七年大婚二五年祝典

### 四―一、対等に着座する天皇皇后

明治二七年（一八九四）三月九日、明治天皇と皇后の結婚満二五年を祝す式典が開催された。結婚二五年は銀婚式である。銀婚式は西欧由来の風習であり、日本皇室にはそれまで当然その儀式はなかった。銀婚式を行うことを唱えたのは伊藤博文で、天皇からも式への賛意を得ることも出来た。天皇は日本皇室初となるこの式を行うにあたって、欧米各国の諸例を集めさせた。<sup>(60)</sup>

欧米諸国に在りては、結婚後二十五年に達すれば銀婚式と称して之れを祝賀する風習あり、乃ち之れを字ばんとするなり。天皇此の議を嘉納あらせられ、式部職に命じて海外諸国の例を調査せしめ、是の日皇后宮大夫妻爵香川敬三・内蔵頭白根専一・式部次長三宮義胤・内事課長股野琢・調査課長山崎直胤・宮内大臣秘書官斎藤桃太郎・式部官山内勝明を以て委員と為し、祝典の準備を為さしめらる

『明治天皇紀』の記事以前の明治一五年（一八八二）、駐ロシア特命全權公使の柳原前光が明治一二年のスウェーデン皇帝の銀婚式報告を井上馨外務大臣へ送っている。<sup>(61)</sup> また同様に宮内公文書館には明治二六年（一八九三）に収集した独、澳、露、伊、英各国銀婚式の事例書き上げも残っている。<sup>(62)</sup> 式の準備は進んだが、「但し叡旨に依り厳に銀婚式の称を用いるを避けしめたまふ」と天皇は「銀婚式」の名称を用いることを拒んだ。それによりこの祝典名は「大婚二五年祝典」となった。また今まで行ったことのない儀式を導入するにあたり、明治二七年一月二三日に侍従長侯爵徳大寺実則を青山御所に遣わし事前に皇太后に儀式挙行の旨を伝えている。

三月九日に行われた儀式は銀婚式に因み銀尽くしであった。前述の各国調査書には銀を用いることなどの詳細は記されていないが、民間で発行さ

れた『銀婚の大典』<sup>(63)</sup>には英国銀婚式の様式として、招待状は銀文字で印刷し、招待された人は銀製の器具を贈り、当日の机上には白色の花弁花瓶と銀器を取り混ぜ、当日の家婦人の衣装は白色で銀具を用いて装飾をする、などと銀尽くしの様子が事細かに書き出されている。この日の後の服装は「皇后は白色の中礼服に勲一等宝冠章を佩びさせられ、玉冠を戴きたまふ、御裳には銀糸を以て花鳥を織り出だせり」<sup>(64)</sup>であったと記されている。当日参列した旧津和野藩第一三代目藩主亀井茲明は「皇后陛下は宝冠をいた、かせられ。白地に緞子織に銀糸もて浮文様の小葵形を織出し。裏ハ白縐子なるおほん礼服をめもあやに装ひたまひ」と花鳥文ではなく、小葵文と記している。

宮内庁三の丸尚蔵館『明治の御慶事』展において展示された御物ローブ・デコルテ（大婚二五年式典御服）は、「白と銀の色彩でまとめられた、ボデイス（上着）とスカートのツーピースで、襟は広く、短い袖を付ける。ボデイスとスカートの全面には銀糸やスパンコールを用いた立体感のある刺繍で菊や女郎花などの秋草と籬を表し、袖、脇から背面にかけては、銀糸による小葵に菊模様の織物が用いられている」とあり、小葵文とであると述べている。花鳥文であれ、小葵文であれ、いずれにしても白銀に菊などの文様が織り出されたものであることが確認出来る。いかにも日本の伝統的文様であるこの生地織物制作にあたったのは四代飯田新七であるという。

「日本の皇后はお召物にはたとえ洋服であっても国産の生地のみを用いるとの原則をおもちであることから、わたしたちは錦などの皇后御用の織物作りに携わっている多くの工場を見学した。皇后のお召物のデッサンそれに色彩の選択についてのわたしたちのいくつかの助言を製造業者は喜んで受け入れた」「西欧の人々を驚かせたあのすばらしい京都の絹刺繍だ」とモールが明治二〇年の段階で記したように、皇后の国産品保護育成の姿勢はここでも揺らがない。

皇族妃のドレス服制は皇后に合わせるため、皇后の服制の格式が決まると、各宮へ事前に知らせがいくこととなる。<sup>(65)</sup> 今回儀式では皇族妃だけでは



なく多くの国内官僚が夫妻で参加することとなるため、事前に「御祝典当日ノ婦人着服（中礼服ローブデコレテ）ノ略図ヲ製シ左ノ通り配布セリ」とし、内務省に五〇枚をはじめとし、各省庁に略図が印刷配布された<sup>(26)</sup>。

この日午前十一時、天皇皇后は鳳凰の間に出御し、二百余名よりの拝賀を受けた。午後には観兵式のために青山練兵場に向かった天皇皇后は同じ馬車に二人揃って乗った。そして、饗宴（宮中晩餐会）が開催される豊明殿に出御の際、「天皇は皇后の御手を取らせられ」たのである。その夜、一〇時四〇分正殿での舞楽御覧のため再び天皇は「皇后の御手を携へて出御」し、二人は並んで座ったのである<sup>(27)</sup>。

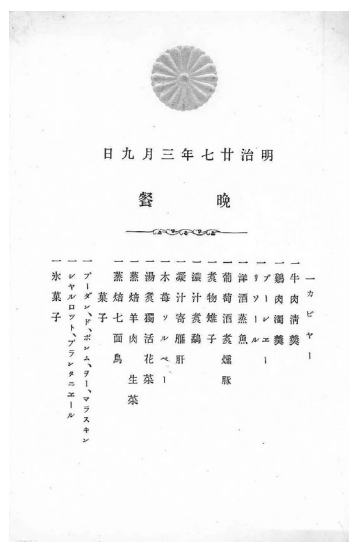
モールが「天皇が皇后と同じ宮廷馬車に乗られるような事態は西洋の風習への大譲歩であるように思われた。旅行中の外国の王侯のために開かれる洋風の夕食会や昼食会の折でも、天皇は長い間どうしても皇后に腕をお貸しになるという気持ちにはなれなかった<sup>(28)</sup>」と嘆いてから七年の月日が経過していた。この間に「天皇は、玉座が皇后の座と同じ高さにあることを、どうしても承服されなかった。それよりも、高くせよとのことなのだ。ところが井上（馨）伯はそれに反対だった。ある時、伯が参内したところ、玉座の下に厚い絹の敷物がこっそり置いてあるのを発見したので、伯はこれを引きずり出して、室のすみに放り投げたが、これがため、大変な騒ぎが持ち上がったことはいまでもない<sup>(29)</sup>」という騒動もあった。それほど天皇は皇后と同等であることを嫌忌していたのである。

しかし遂にこの日、玉座に二人が並んで座り、天皇が皇后に腕を貸したのである。この式典を評しアメリカでは「日本に於ける今回の祝典は従来家族内に行はれたる旧慣を改め男女同等の風に近づかしめんとの叡慮を表せらるるの主意に出でたるものなり」と報道された<sup>(30)</sup>。

#### 四―二、皇室オリジナルデザインのパンプキンエール

大婚二五年祝典当日の饗宴の献立は当然洋食・フランス料理であった。しかし献立は大日本帝国憲法發布式饗宴献立より「進化」していた<sup>(31)</sup>【図

3】。オードブルにキャビアが登場しているのである。料理品目も大日本帝国憲法發布式ではデザートを除いて一〇品であったが、今回は一三品に増えている。前稿でも述べたように宮中晩餐会では好きな料理を好きなだけ食べればよいので、この一三品すべてを食べる必要はない。必要はないが豪華である。香川家史料中には明治二二年の大日本帝国憲法發布式と今回の大婚二五年祝典の経費を比較した史料（菟蓐版印刷）がある<sup>(32)</sup>。それによれば明治二二年の「賜宴費」は八、三四七円四六銭七厘で、二七年は「宴会費」八一、三三五円五三銭一厘と一〇倍に上っているのである。



【図3】 明治二十七年三月九日  
大婚二五年祝典宮中晩餐会  
メニュー

そしてこの宴に陪した者には「銀製菓子器」が下賜された。

午後七時過賀宴あり（中略）豊明殿に出御の際、天皇は皇后の御手を取らせられ、式部長先導したてまつり（中略）饗宴中式部職楽隊奏を奏し、離宮に於ては陸軍軍楽学舎生徒隊奏を奏す、饗宴は洋風の献立にして、宴に陪する者に銀製菓子器を賜ふ、其の蓋には同じく銀製の岩上の鶴亀を付したり、宴訖つて千種の間に入らせられ、各国使臣夫妻等に握手を賜ひ、御款談あり、十時入御あらせらる、入御の後、陪宴の各員並びに別に舞楽の陪覧に召されたる者正殿に参入し、各々其の席に著す、十時四十分天皇、皇后の御手を携へて出御あらせらる、（中略）舞楽終りて、親王・同妃及び大臣・外国使臣夫妻等は竹の間に於て、其の他は豊明殿

に於て立食の宴を賜ひ、鶴亀の彫刻ある銀製菓子器を賜ふ<sup>(47)</sup>

蓋に「銀製の岩上の鶴亀」が付されている鶴亀立像形ボンボニエールである【図4】。



【図4】鶴亀立像形ボンボニエール（個人蔵）

その後の舞楽の宴に招かれた者には「鶴亀の彫刻ある銀製菓子器」が下賜された<sup>(48)</sup>【図5・6】。

このようにボンボニエールも銀婚式に相応しく銀で作られている。前稿で述べたように明治二二年の憲法発布式典のボンボニエールは「銀筐綵囊ヲ以テシ」であつた<sup>(49)</sup>。「綵囊」すなわち袋状のものも用意され、「銀筐」といいながら実際には銀鍍金であつたことを考えると純銀での菓子器制作はこの時からとなるのではないか。いわゆる「銀のボンボニエール<sup>(50)</sup>」の淵源はここにある。

そして、これら三点のボンボニエールは明治二二年時と違い、宮内省よりの仕様書を以て発注制作された「皇室オリジナルデザイン」のボンボニエールであつた。ボンボニエールの制作にあつたのは鈴木長吉である。明治二七年二月一七日付朝日新聞朝刊には<sup>(51)</sup>



【図5】円形鶴亀文ボンボニエール（個人蔵）



【図6】楕円形鶴亀文ボンボニエール（個人蔵）

宮内省の御注文品 宮内省より鑄造家鈴木長吉氏へ銀製小形の亀四五百個の御注文あり 此外鈴木氏ハ銀婚式に関する銀製美術品数百個の注文を受け目下職工を督して昼夜を分かたず製造中の由なるが右小形の亀等ハ当日御式に列する貴顕の人人は下賜せらるゝものなりとぞ

と記載されている。

依頼を受けた鈴木長吉は嘉永元年（一八四八）に武蔵国石井村で生まれた。岡野東竜斎に師事し、蠟型鑄造を得意とした。明治七年（一八七四）には起立工商会社の創立に参画し、鑄金部主任として活躍し、内外の博覧会に作品を出品し高い評価を得た人物である。重要文化財である「十二の鷹」など鳥の造形を得意とし、「十二の鷹」の制作にあたつては実際に鷹を飼つて写生を繰り返し、三年の歳月を以て作品を完成させたという。その後、明治二十九年（一九〇六）には帝室技芸員に任じられた<sup>(83)</sup>。しかし、この鶴亀立像形ボンビニールを实見した山階鳥類研究所の小林さやか研究員から「鶴の尾羽は黒色ではない。鶴の羽で黒色なのは風切り羽であり、畳むとまるで尾羽が黒色であるように見えるが、尾羽は白いのである。鳥が得意な作家がこのような間違いを犯すのであろうか」との指摘を受けた。

鈴木長吉は宮内省より【図7】<sup>(83)</sup>のような仕様書を渡され、制作をしたのであろう。確かにこの仕様書では尾羽を「イブシ」にするように指示が出されている。小林研究員によれば江戸時代の絵画では鶴の尾羽を黒色とすることが様式となっていたという。確かにそのような描かれた方をしてゐる鶴の画が多いようである。発注した宮内省では江戸の絵画様式で仕様書を作成したと考えられる。鳥の生体を承知している鈴木長吉が苦悩したのであろうことは想像に難くない。

新聞にある通り、長吉のプロデュース下、様々な職人がこの制作にあたつた。現存するボンビニールを観察すると下の岩、亀、鶴が別々に作られていたことは一目でわかる。その他、尾羽部分も取外しが出来、脚も別制作である。頭から首部分も恐らくは別に作り、胴体と後で接続していると

思われる。このように様々な職人が参画しボンビニールの創作にあたっているのである。工芸職人の保護育成という、皇室の意図通りであった。



【図7】宮内省よりの発注仕様書

当日饗宴に招待された者は男子七八〇人、女子六一七人で、そのうち参加者は男子五三四人、女子八七人であった。また舞楽陪覧には男子一五一八人、女子八六一人が招かれたが、参加者は男子一〇七二人、女子一三六人であった<sup>(84)</sup>。この大勢の、招待を受けたが当日不参であった者にも追つてボンビニールが届けられた。その後「銀製鶴形及丸形菓子器残余之分 左之人名之者へ各一個ツ、贈付可相成哉」として各宮家などに届けられ、奥御用として十一個、その他宮内省職員、青山御所女官、式当日の侍立武官などに計一四一個が、さらに当日御用の者や御歌所関係者などに三一〇個が配布された。

各所への配布を終え、最終的に残ったもの内、二個は調度局で見本として保存され、残りの鶴亀立像形一八個、円形（楕円形）三七〇個は総て皇后に渡された<sup>(85)</sup>。これはボンビニールの差配は皇后の主権に関わる案件であることの証左となるのではないだろうか。後年の記録となるが昭和九年（一九三四）に満州国特使鄭孝胥が参内した際の午餐会では「ボンビニエー



ルハ甲、丸鳥籠、角鳥籠、乗駕籠ノ外、久方振ニテ伏籠ヲ加へ各八個宛計四十個ヲ用意セリ」<sup>(86)</sup>とあり、主語が書かれていないものの、誰かが「久方振ニテ伏籠ヲ加へ」てボンボニエールをセレクトする行為をしていたことが判明する。この行為者も皇后であったのではないだろうか<sup>(87)</sup>。

この日の饗宴の様子は『英国公使夫人の見た明治日本』、『ベルギー公使夫人の明治日記』等にも描かれている。

三月九日の朝、皇居において盛大な祝宴がありました。（中略）催しの第一は晩餐会でした。（中略）客人ひとりひとりの皿のかたわらには、ボンボン入れがあり、その蓋は銀と瑠璃でつくられたミニチュアの鶴と亀でできていました。これらは天皇陛下より客人への贈り物であり、私にとっては手離しがたい宝のひとつとなっています<sup>(88)</sup>。

晩餐の終り近くになって、小さな美しい銀製の鶴が、招待者銘々への贈物として他渡された。それは美しい芸術作品で、素敵な記念品となるだろう<sup>(89)</sup>。

と記されている。また後書では「（舞楽の）帰りの戸口で、それぞれ鶴と亀のついた可愛い銀製のボンボン入れをいただいた」<sup>(90)</sup>ともある。つまり鶴亀立像形ボンボニエールは銘々のテーブル上に置かれ、円形（楕円形）鶴亀文ボンボニエールは帰り際に渡されたという配布形式をも伺い知ることが出来るのである。

この他大婚二五年祝典にあたっては、日本で最初の記念切手「明治銀婚記念切手」も発行された（五銭、二銭の二種。五銭は一〇〇万枚、二銭は一四八〇万枚）。当時、日本には記念切手の概念がなく、祝典を記念する切手を望んだ在留外国人の新聞投書によって政府が動き、通信大臣黒田清隆の命で急遽発行されることとなったという。この後、皇室慶事の際に記念切手が発行される慣例の嚆矢となった<sup>(91)</sup>。

## おわりに

宮中晩餐会の様相考察から明治日本の西欧化を辿る稿も本稿で三回目となった。今稿では宮中晩餐会そのもののハード面の考察というより、ソフト面である接遇や天皇皇后の振る舞いを主眼とした。

西欧王室では舞踏会やオペラ鑑賞などが饗宴の後に行われることが多いが、それを日本の皇室で行うことは精神的にも物理・技能的にも難しいものがあつた。そこで宮中では西欧の催しを日本風へ読み替えを試みた。奏楽（オーケストラ、オペラの読み替え）、打毬の実演（ボロの読み替え）、鴨場での鴨猟（狩猟の読み替え）などが日本皇室の接遇の様式になっていく。

精神的な部分の西欧的な振る舞いを体現しようとする皇后の姿も確認することが出来た。日本赤十字社と東京慈恵医院という二病院を皇室の庇護下におくこととしたのは、プロイセン王およびドイツ皇帝ヴィルヘルム一世皇后のアウグスタの姿勢を模倣したものであることはすでに指摘されていたところであるが、その令旨にあるように西欧を取り入れながらも光明皇后の発願の施薬院を継承するとしている。これは「婦女服制についての思食書」において、洋装というのは西欧に倣うが、その形は日本の古代に範を持ち、その制作にあたっては国産品の使用を奨励するというロジックと同一であることも指摘した。

この時期頻繁に日本を訪問するようになった外賓への対応も、以前のような右往左往するものではなく、的確な行動をとれるように進化していく。特にエルトゥールル号遭難に対する皇后の振る舞いや、大津事件時の天皇の迅速で適切な対応により、国際的な評価と信頼を得ることが出来るようになっていたのである。

そして、明治二七年の大婚二五年祝典を迎える。この祝典の宮中晩餐会には天皇は皇后の手を取り出御した。アメリカではこの様子を「旧慣を改め男女同等の風に近づかしめんとの叡慮を表せらるる」と報道された。天皇が本心から男女平等を受け入れたとは思えないが、少なくともマナーと

しての「レディファースト」は体現出来るようになっていく。舞楽御覧の際には天皇后は玉座に並んで座った。天皇は皇后と同列に座ることを嫌悪していたが、遂に並座したのである。

この式典は銀婚式に因み銀尽くしで行われたが、皇后のローブデコルテには国産の織地が使われ、日本刺繍による日本文様があしらわれていた。またこの時に下賜されたボンボニエールも銀婚式に相応しく銀製で、形は鶴亀形であった。これは当日の饗宴会場に置かれた島台と同じ意匠形である。鶴亀松で蓬莱山をあらわす島台も日本の伝統として祝事の際に設置されるものである。これをミニチュア化したような意匠の宮内省からの発注書も残されており、皇室オリジナルのデザインで制作されたことが明らかにされるのである。この仕様書に基づいてボンボニエールを制作したのは後に帝室技芸員となる鈴木長吉であった。ボンボニエールは当日不参であったものにも追って下賜され、さらに関係者に配られた残りは皇后の手許に渡された。ボンボニエールの差配権が皇后にあったことを示唆していると考えられる。

この時期の宮中晩餐会をはじめとする接遇をみるに、西欧を取り入れながらも日本固有の文化を継承する、現在の皇室に通じる姿勢があらゆるところで確認出来るのである。

#### 謝辞

本稿を成すにあたり、多くの方々からご教示とご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。(敬称略)

葦名ふみ、石井裕、上野秀治、植木淑子、梅田優歩、大西智子、小島温子、香川擴一、香川和敬、北白川慶子、北白川明子、黒田清子、小林さやか、田中潤、千葉功、戸矢浩子、那須香織、中島良司、藤井正弘、三須武典、吉原康和

一般社団法人霞会館、学習院大学文学部史学科、宮内庁宮内公文書館、国立国会図書館憲政資料室、明治神宮外苑聖徳記念絵画館

本研究はJSPS 科研費 JP20K00175 の助成を受けたものです。

#### 註

- (1) 長佐古美奈子「宮中晩餐会の歴史的考察その(一)——現在に続くイギリス風の導入——」(『学習院大学史料館紀要』第二十六号、二〇二〇)
  - (2) 長佐古美奈子「宮中晩餐会の歴史的考察その(二)——明治二二年大日本帝国憲法発布式の諸様相——」(『学習院大学史料館紀要』第二十七号、二〇二一)
  - (3) 香川家史料の閲覧に際しては学習院大学文学部史学科千葉功教授にご高配を賜った。
  - (4) 詳しくは前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その(二)——明治二二年大日本帝国憲法発布式の諸様相——」一四頁を参照のこと。
  - (5) 前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その(二)——明治二二年大日本帝国憲法発布式の諸様相——」一二頁。
  - (6) 宮内庁宮内公文書館蔵「英国皇室諸礼観察報告」(識別番号71729～71731)。以下宮内庁省略。
- 国立国会図書館憲政資料室蔵長崎省吾関係文書1394～6「[英国帝

室諸礼觀察報告」末松謙澄作成宮内卿徳大寺実則宛 明治一四年一月一三日(九月六日)。以下所蔵館名略。

(7) 長崎省吾関係文書160

(8) 長崎省吾関係文書1476

(9) 長崎省吾関係文書116

(10) 宮内公文書館蔵「御用度録 明治一九年 購入六」(識別番号63284) ドル建て払いになっている理由は不明である。

(11) 宮内公文書館蔵「普國礼典」(識別番号71866)・宮内公文書館蔵「英  
国帝室諸礼觀察報告3」(識別番号71731)

(12) もちろんその季節(シーズン)に応じた適切な組み合わせで行うことが必須要件となる。

(13) 「モール氏より聞き取り書」においても「夜会」についての詳細な記述がある。(長崎省吾関係文書181)

(14) 前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その(二)——明治二二年大日本帝国憲法発布式の諸様相——」一三頁。

(15) 「明治十九年四月十七日付 敬三書簡 (写本より翻刻)」(『学習院大学史料館紀要』二七号掲載二五番)

(16) 「明治十九年四月二十二日付 敬三書簡 (写本より翻刻)」(『学習院大学史料館紀要』二七号掲載二六番)

(17) 「明治十九年七月十九日付 敬三書簡 (四五七七号)(端裏朱書「十九年七月三十一日」)」(『学習院大学史料館紀要』二七号掲載三五番)

(18) 長崎省吾関係文書11812

このモールの考えと末松謙澄の歌舞伎近代化のための演劇改良運動との関係性は不明だが、この後、明治二〇年四月二六日に天皇は井上馨邸に行幸し、初めて歌舞伎を鑑賞している。(それ以前明治一三年に寺島宗則邸行幸の際に歌舞伎上演を試みたが岩倉の反対で中止となっている。『明治天皇紀』巻六 七三七頁(吉川弘文館、一九六九)。以下『明治天皇紀』と略

(19) 『明治天皇紀』巻七 明治二二年八月七日条 三一九頁。

(20) オットマール・フォン・モール 金森誠也訳、『ドイツ貴族の明治宮廷記』(新人物往来社、一九八八)一一一頁。

(21) 小松宮の欧州差遣については本紙一九頁～三五頁の石井裕・梅田優歩「香川志保子の小松宮欧州巡行同行について」を参照のこと。

(22) 堀口修監修「長崎省吾談話速記」『明治天皇紀』談話記録集成臨時帝室編修局史料(ゆまに書房、二〇〇三)二二三頁。

(23) 『明治天皇紀』巻七 明治二一年一月一九日条 一〇頁。  
この日饗宴其の他は

「諸事悉く洋式に則る、然れども諸事簡素を旨とし、客歳五月有栖川宮第行幸に準じ、又諸器具並びに調度類、多く宮家の物を用いしめたまふ」とあり、有栖川宮家と同様に小松宮家においても正餐を執り行える食器が取り揃えられていたことがわかる。

(24) 前掲「長崎省吾談話速記」二二五頁。

(25) 打毬が皇室行事になったことについては近藤壮「宮内庁主馬班打毬の歴史と概要」(霞会館『騎馬打毬』、二〇〇九)一一二頁に詳しい。

(26) 前掲「ドイツ貴族の明治宮廷記」五四頁。

(27) 前掲「ドイツ貴族の明治宮廷記」六五頁。

(28) 明治神宮監修『昭憲皇太后実録』(吉川弘文館、二〇一四)上巻、明治二〇年三月一六日条(以下『昭憲皇太后実録』と略)、四一〇頁。

(29) 香川家史料1566、辻岡建志「昭憲皇太后と東京慈恵医院」(『港区と皇室の近代』港区立郷土資料館・宮内庁宮内公文書館、二〇二〇)九七頁。

(30) 『明治天皇紀』巻六 明治二〇年四月二十六日条 七三八頁。

この令旨に基づき、女官、華族子女の慈善寄付がなされた。香川家史料にも毎月の支払い書き上げに「慈善会 一円」が計上されていることが見える。(香川家史料1920)

(31) 『明治天皇紀』巻六 明治二〇年一月一七日条 六八〇頁。

(32) 前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その(二)——明治二二年大日本帝国



- 憲法発布式の諸様相——二二頁。
- (33) 『昭憲皇太后実録』より。香川家史料16366には一九一〇年の日英両文による両社の沿革書き上げ書類がある。用途については不明である。
- (34) 明治神宮外苑聖徳記念絵画館蔵。
- (35) 写真1：縦16.4cm×横10.4cm 鶏卵紙プリント。台紙・裏面情報なし。
- (36) 平常服（ヴィジティングドレス）は礼服に次ぐ服で、皇后が拝謁を受ける場合や行啓の場合に着用した。
- (37) 明治神宮編集『壁画謹製記録（明治神宮蔵）』（明治神宮叢書第18巻資料編2 国書刊行会、二〇〇四）
- (38) 『明治天皇紀』巻六 明治一九年六月二三日条 六〇二頁。
- (39) 『昭憲皇太后実録』明治一九年六月二三日条 三七九頁。
- (40) 香川家史料№20876。
- (41) 『昭憲皇太后実録』明治一九年六月二三日条 三七九頁。
- (42) 『明治天皇紀』巻六 明治一九年七月三〇日条 六二二頁。
- (43) 『明治天皇紀』巻六 明治一九年八月一〇日条 六二五頁。
- (44) 京都民報WEB 京のお人形：京都民報 Web (kyoto-minpo.net) 令和四年（二〇二二）一月六日閲覧。
- (45) 写真2：本紙縦14.2cm×横9.5cm 台紙縦25cm×横18cm。ゼラチンシルバープリント。
- (46) 上田景二編『昭憲皇太后史 全』（中根彦太郎、一九一四）国会図書館デジタルコレクション。
- (47) 前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その（二）——明治二二年大日本帝国憲法発布式の諸様相——」口絵。
- (48) 日本赤十字社HP 一〇〇年以上の歴史を持つ「昭憲皇太后基金」——トビックス——国際活動について——日本赤十字社 (jrcor.jp) 令和三年（二〇二二）一二月二九日閲覧。赤十字社の活動は当初は戦時救助のみであった。
- (49) 今泉宜子『明治日本のナインゲールたち 世界を救い続ける赤十字「昭憲皇太后基金」の100年』（扶桑社、二〇一四）一四二頁。
- (50) 前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その（二）——明治二二年大日本帝国憲法発布式の諸様相——」一九～二二頁。
- (51) 香川家史料17923～17936の「明治天皇御大葬書類在中 志保子分」の中にはアウグスタ皇后の写真が含まれている。理由は定かではない。
- (52) 前掲「香川志保子の小松宮欧州巡行同行について」
- (53) 和歌山県串本町HP。日本とトルコの絆をつないだ物語——串本町 (town.kushimoto.wakayama.jp) 令和四年（二〇二二）一月六日閲覧。
- (54) 宮内公文書館蔵「外賓接待録2 明治23年」（識別番号7638-1）
- (55) 宮内公文書館蔵「外賓接待録2 明治24年」（識別番号7639-2）
- (56) 宮内公文書館蔵「外賓接待録1 明治26年」（識別番号7630-1）
- (57) フランツ・フェルディナンド著、安藤勉訳『オーストリア皇太子の日本日記』（講談社、二〇〇五）一七二頁。
- (58) 前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その（二）——明治二二年大日本帝国憲法発布式の諸様相——」一四頁。
- (59) 宮内公文書館蔵「外賓接待録2 明治26年」（識別番号7630-2）
- (60) 『明治天皇紀』巻八 明治二七年一月一七日条 三七〇頁。
- (61) 宮内公文書館蔵「瑞典国皇帝陛下銀婚式 一八八二年」式部職（識別番号71776）
- (62) 宮内公文書館蔵「明治二六年 各国金銀婚式取調録」式部職（識別番号10051）
- (63) 宇都宮安明編『銀婚の大典』（二三館、一八九四）
- (64) 『明治天皇紀』巻八 明治二七年三月九日条 三八五頁。
- (65) 小平美香『昭憲皇太后からたどる近代』（べりかん社、二〇一四）一四一頁。
- (66) 宮内庁書陵部・宮内庁三の丸尚蔵館編集『明治の御慶事——皇室の近代事始めとその歩み』（宮内庁、二〇一八）六四頁。

- (67) 四代飯田新七は、明治二六年に高島屋飯田新七東店を開店している。
- (68) 前掲『ドイツ貴族の明治宮廷記』九一頁。
- (69) 「皇族ハ燕尾服、妃ハローブモント(右妃着服ノコトハ前以テ長崎主事ヨリ接待掛田中式部官ヘ書面ヲ以テ通知アリタリ)」(宮内公文書館蔵「外賓参内録 明治22年」(識別番号1941))
- (70) 宮内公文書館蔵「明治二七年 大婚二五年御祝典録一」(識別番号5721)
- (71) 『明治天皇紀』巻八 明治二七年三月九日条 三八七頁。  
明治神宮外苑聖徳記念絵画館蔵「大婚二五年祝典」画(長谷川昇画、昭和二年)および『明治天皇紀附図』「大婚二五年祝典」(二世五姓田芳柳画、昭和八年)には並列して座る様子が描かれている。その解説文には「絵画は舞楽のうち、太平楽を御覧になっている場面で、記録に基づいて祝典当日の模様を再現描写したものである」とある。宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システム ギャラリーバックナンバーHp。令和四年一月三〇日閲覧。
- (72) 前掲『ドイツ貴族の明治宮廷記』五七頁。
- (73) トク・ベルツ編『ベルツの日記』上巻(菅沼竜太郎訳、岩波文庫、一九七九)一五八頁。
- (74) 『昭憲皇太后実録』明治二七年三月九日条 六四九頁。
- (75) 山尾家史料36(学習院大学史料館蔵)
- (76) 香川家史料1361 なお、前稿で参考とした宮内公文書館蔵「会計予算決算録 大膳課」(識別番号3060)では一八六〇〇円となっている。前稿二三頁。
- (77) 『明治天皇紀』巻八 明治二七年三月九日条 三八七頁。
- (78) 『明治天皇紀』巻八 明治二七年三月九日条 三八八頁。
- (79) 前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その(二)」明治二二年大日本帝国憲法発布式の諸様相」二五頁。
- (80) ボンボニエールという用語が広く知られるようになったのは、秩父宮妃勢津子が『銀のボンボニエール』(主婦の友社、一九九一)を刊行してからと思われる。
- (81) 明治二七年二月一七日付朝日新聞朝刊
- (82) 文化遺産オンラインHp。  
十二の鷹 文化遺産オンライン (nii.ac.jp) 令和四年(二〇二二)一月六日閲覧。
- (83) 宮内公文書館蔵「用度録二 明治二七年」(識別番号824-2)
- (84) 女子の参加者が少ないことは問題となった。
- (85) 宮内公文書館蔵「明治二七年 大婚二五年御祝典録一」(識別番号5721)
- (86) 宮内公文書館蔵「昭和九年 外賓参内録 満州国特使白耳義国特使ノ部 式部職」(識別番号824)
- (87) 宮内公文書館蔵「昭和九年 外賓参内録 満州国特使白耳義国特使ノ部 式部職」(識別番号824)には「御覧モノ」書かれた小札が挟まれている。
- (88) メアリー・フレイザー著、ヒュー・コータッツ編集、横山俊夫訳『英國公使夫人の見た明治日本』(淡交社、一九八八)三二七頁。
- (89) エリアノーラ・メアリー・ダヌタン著、長岡祥三訳『ベルギー公使夫人の明治日記』(中央公論社、一九九二)三八頁。
- (90) エリアノーラ・メアリー・ダヌタン著、長岡祥三訳『ベルギー公使夫人の明治日記』(中央公論社、一九九二)三九頁。
- (91) 「お札と切手の博物館」Hp 独立行政法人 国立印刷局「お札と切手の博物館」日本で最初の記念切手 明治銀婚記念切手 (npb.go.jp) 令和四年二月一七日閲覧。

